



グループワークの様子

産業カウンセリング研究所だより

産業カウンセリング研究所主催

村山正治九州大学名誉教授による
新しい事例検討法

「PCAGIIP」入門講座の報告



本入門講座の開催について

さる8月13日(土)の10時から6時間にわたって、標題の講座を開催しました。会員の皆様が、新しい事例検討法であるPCAGIIP(パーソン・センタード・アプローチ・グループ・インシデント・プロセスの略、通称「ピカジップ」)について学ぶ機会として、開発者の村山正治先生をお招きして、入門講座を企画しました。

講座は、本部の研修室で実施されました。参加者は関東地域だけでなく、北は上信越支部、南は九州支部まで、幅広い地域から参加

いただきました。定員は先着順30名としましたが、一週間で定員を超え、キャンセル待ちとなったほどの人気でした。お盆の最中でしたが、当日は29名の会員が参加しました。その中には、すでにPCAGIIP法を体験されている参加者も何人かいらっしゃいましたが、大半は初めての体験でした。

PCAGIIP法とは

事前課題で、村山先生の著書、『新しい事例検討法 PCAGIIP入門 パーソン・センタード・アプローチの視点から』(村山正治・中田行重著 創元社 2012)を読ん



村山正治 九州大学名誉教授

できていただくよう、お願いをしました。

当日の午前中は、事前学習の知識を元に、村山先生から、PCAGIIPを開発された経緯を伺いま

らったものの中から、産業カウンセラーになじみの深いテーマを村山先生が選ばれました。

当日の午後は、まず参加者同士が知り合うため、グループに分かれ、自己紹介が行われました。「ストレス解消法」を紹介しあうことで、グループのメンバーの距離感が近くなったようです。

その後、PCAGIIP法の実習のための事例の選定がされました。これは参加者から事前にA4の紙一枚に簡潔に記述して提出しても

ないこと、確かめたいこと、気になることを事例提供者に一つずつ質問を行い、その対応を記録者がホワイトボードに書き留めます。それを繰り返すことで、事例提供者と事例をめぐる状況の全体像が見えてきます。

このホワイトボードに書かれた情報をファシリテーターが整理し、「ピカ支援ネット図」としてまとめ、メンバーと共有します。

最後には質疑応答の時間が設けられ、参加者からはPCAGIIP法の進め方の詳細についての質問や、自分の現場でどのように活かせるのかに関する質問が多く出されました。

参加者の感想は

後日、参加者に感想を求めました。「普段経験しているグループ・スパー・ビジョンとは異なるPCAGIIPを体験的に学べた」「産業カウンセラーならではのPCAGIIPの体験をこれからも重ねたい」「ファシリテーション力をもっと研鑽したい」等という声とともに、「事例に対する見立てができていない状況での事例提供をすると、違っ

した。大学等の機関における心理臨床家の養成訓練の場では、ケースカンファレンスは大切な場ですが、しばしば、事例提供者は批判されたように感じ、傷つくことも多くあります。また、助言をもらうだけでは、対人援助職として成長が望めません。

こうした状況に対し、安心して発言できる雰囲気を作ると、参加メンバーが持っている知恵が自然に浮かび上がり、グループメンバー間の相互作用から、事例提供者に役立つヒントを生み出されるという考えを元に、村山先生は新しい方法を開発されました。

PCAGIIP法の考え方は、「事例」が主役、つまり事例に対する問題解決が主目的ではなく、「事例提供者」を主役と考えます。事例検討に参加したメンバーも、事例に積極的にかわり、「事例提供者」を理解し支持します。そうした中で、「事例提供者」がエンパワーされ、自分で問題を探る視点が身につく、心理的成長が期待されます。

全体を振り返って

前述のようにPCAGIIP法は、「事例」が主役ではなく、「事例提供者」が主役です。この点で、「事例」が主役の事例検討会に慣れ親しんでいる参加者にとっては、事例だけの体験では腑に落ちるところまではいかなかった方もいらっしゃるかもしれません。

また、PCAGIIP法は、教育現場と大学院教育、精神科における臨床心理士訓練、保健児童福祉、看護、いのちの電話、キャリアカウンセリング、自治体メンタルヘルスなどで経験的に有効性が確かめられています。産業界での応用の検討はこれからということもあるようです。今後、この方法を基に、産業カウンセラーが産業界での実践を積み重ねることによって、新しい事例検討の方法を発展させることが期待されます。(文責:シニア・アドバイザー 渡邊忠)